

拡充と深化

～館長退任にあたって～

弘前市立郷土文学館が指定管理者による管理運営となって 5 年が過ぎた。弘前市の直営時代がそうであったように、弘前市立図書館長が郷土文学館の館長を兼務するということが、私が館長となったわけだが、郷土文学館には、県内第一級の見識と実績を誇る企画研究専門員の櫛引洋一さんがおられて、企画展示や各種の講座、多彩なイベントを開催して下さった。とりわけ従来の郷土文学館にはなかった、一部の文学研究者や愛好者にとどまることなく、幅広い方々の観覧に資する「貢献型」重視の企画や展示を行ってきたことは特筆に値する。

例えばそれは、「ラウンジのひとつ」における薩摩琵琶の弾き語り、チェロとコントラバスによる二重奏、詩の朗読などが好評を博し、また弘前市ゆかりの佐藤紅緑や石坂洋次郎をはじめとする「文学忌」の新企画、映画上映会、文学散歩となって具現化され多くの市民が参加して下さった。また地道な作業であり、工夫であったが、展示についても大型パネルの使用をはじめ、丁寧でわかりやすいキャプションや企画展示のテーマ設定、展示資料が新鮮で多くの人を魅了することができた。

有料施設ではあるものの直営時代と比較して多くの弘前市民、とりわけ小・中・高校生や大学生の来館、利用が飛躍的に増えたのはこれらの講座、イベント、展示の工夫と小・中・高校生、あるいは大学生などの弘前図書館の見学者を郷土文学館へご案内をした効果、または指定管理の共同事業体であるアップルウェブによる「ラジオ図書館」や生放送番組「図書館に行こう」、フリーマガジン「apli」での PR 効果によるものである。

いま退任を前にして、今後の郷土文学館については微塵の憂いもない。櫛引さんの下でスタッフが育ち、その中からやがて郷土文学の研究者が生まれるだろう。その萌芽はすでに随所に認めることができるから、私は後顧の憂いなく退任できるのである。

弘前市立郷土文学館（指定管理）前館長 山谷 英雄

新資料紹介

新聞『日本』—130 年前の「日本」の動向を示す貴重な資料

弘前市出身で明治期を代表するジャーナリスト陸羯南（安政 4 年～明治 40 年）が主筆を務めた新聞『日本』の寄贈を受けた。青森県出身で東京都在住の越田清一郎こしだせいしろうさんが、東京・上野の古物商から入手したもので、明治 26 年 3 月から 28 年 7 月にかけての計 293 部。「羯南の研究に役立ててほしい」との思いから当館に寄贈の申し出があった。130 年近く経っているとは思えないほど状態も良く、明治 26 年から 28 年は対外硬運動と日清戦争という政治的熱気で盛り上がり、正岡子規や佐藤紅緑も在籍。日本新聞社に勢いがあった時期の発行も含んでいる。

明治 22 年に創刊した新聞『日本』は国民主義を掲げ、たびたびの発行停止処分にも屈せず堂々と論陣を張り、羯南は新聞人として郷党の後輩に大きな影響を与えた。

当館が所蔵する明治 30 年代の 316 部に今回寄贈を受けた 293 部が、〈明治期を代表するジャーナリスト陸羯南〉のさらなる研究のための貴重な資料に加わった。



当館にて令和 3 年 10 月 30 日から 11 月 5 日の特別展示で初公開した。

◇ラウンジのひとつ

6 月 4 日 (土)
平尾鶴朋 薩摩琵琶を弾き、語る
出演：平尾鶴朋
(薩摩琵琶 鶴田流演奏者・錦風流尺八演奏者)

◇北の文脈文学講座

6 月 18 日 (土)
一戸謙三の青春歌—「虚無と不安」
講師：一戸晃
(一戸謙三・孫、青森県近代文学館資料調査員)

◇文学散歩

「詩人 一戸謙三ゆかりの地を歩く」
日 時：令和 4 年 5 月 14 日 (土)
午前 10 時～午前 11 時 30 分
講 師：櫛引洋一 (企画研究専門員)
ゲスト：一戸晃 (一戸謙三・孫)
定 員：15 名 (先着順、事前申込制)
参加料：無料
主な見学場所：藤田記念庭園 (一戸謙三詩碑)、
本町 (出身地周辺)、弘前昇天教会 ほか

◇文学忌

5 月 18 日 (水)
平田小六
・ロビー展示：5 月 16 日～5 月 22 日
・午前 10 時より弘前文学会による朗読会開催

- * 忌日は無料開館。
- * ロビー展示は 1 階ロビーにて行います。
- * 朗読会のお申し込みは不要。



◎申込受付は開催日の 1 か月前より開始。お申し込み、お問い合わせは文学館窓口、またはお電話 (0172-37-5505) まで。



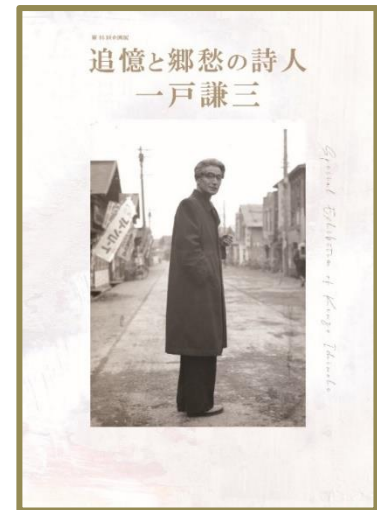
第 46 回企画展

「追憶と郷愁の詩人 一戸謙三」開会

令和 4 年 4 月 1 日～
令和 5 年 3 月 21 日

一戸謙三（明治 32 年～昭和 54 年・弘前市出身）は、大正のはじめから昭和の戦後にいたるまで、長い詩歴を持つ詩人である。ヨーロッパ近代詩の影響を受けた自由詩、津軽方言詩、定型四行詩「聯」など、広く実作・評論などに取り組み、若い詩人らの指導にもあたった。『津軽方言詩集 ねぶた』（昭和 11 年）でその名を知られる謙三だが、長く書き続けた抒情詩もまたすぐれた魅力を持つ。

大正 10 年、22 歳の謙三は、自分の年齢の数だけガリ版刷りした詩歌集『哀しき魚はゆめみる』を出版。大正 8 年から翌年にかけて作った詩のほか、若原純郎の名で発表した短歌が収録されている。のちに、「わたしのこれまでの作品は、その型式に於いて幾度も変遷してゐるけれども、全作品を通じてその精神は不変であることを詩抄を選びながら今さらのやうに考へさせられた。それは、つねに抒情であり、夢の追求であつた。」（「詩抄（※『追憶帖』刊行の序）昭和 22 年より）と記したように、萩原朔太郎『月に吠える』（大正 6 年）『青猫』（大正 12 年）や室生犀星『抒情小曲集』（大正 7 年）の影響のもと、謙三は本格的な抒情詩人として出発したのである。



大正 11 年、慶應義塾大学に在学していた齋藤吉彦（明治 37 年～昭和 5 年・弘前市）との交友が始まる。吉彦は仏文科卒業に際しフランス政府から表彰されるほどの俊英で、仏語で超現実的な詩も書く詩人であった。同時に、柳田国男、折口信夫の影響のもと民俗学者として先駆的な津軽の民俗学的調査・方言研究を行うなど、多方面での活躍を囑望された。展示では 2 人の間で交わされた書簡を紹介。齋藤吉彦宛はがき（昭和 3 年 11 月 24 日）は、謙三のフランス語による最初の手紙である。初冬の岩木山や思い出の弘前公園について書かれた文面には、吉彦による赤鉛筆の添削の跡を見ることができる。吉彦は 26 歳で夭折するが、謙三が吉彦から受けた影響は大きく、吉彦を通して知った柳田民俗学は、のちに謙三が地方主義にもとづく津軽方言詩の道に進む遠因となった。

同じく大正 11 年、謙三は東京市外田端に在住していた福士幸次郎（明治 22 年～昭和 21 年・弘前市）を訪ねている。翌年には、幸次郎の推薦で詩誌『日本詩人』3 月号（新潮社）に「追憶の頁（抒情詩 5 篇）」を発表。室生犀星、佐藤惣之助、川路柳虹などそうそうたる詩人たちの中に謙三の作品が登場した最初である。その後も謙三は県内で次々と創刊された詩誌に寄稿し、指導的な役割を果たす。

謙三は絶えず最新の文学潮流に棹さし、詩論を携えて意識的に作風を進化させてきた。昭和 5 年、総合文芸雑誌『座標』で詩欄の編集委員を務めながらモダニズム詩を発表し、昭和 7 年には百田宗治の誘いで中央詩誌『椎の木』（第三次）に参加する。しかし、モダニズムに飽き足らぬ謙三は、福士幸次郎の「地方主義の行動宣言」（大正 15 年）の理念に活路を見出し、昭和 8 年には初めて津軽方言詩の試作を行う。さらには、佐藤一英の『聯』における定型四行詩の制作とともに、音数律や韻律の理論の検証・具体化を進めていく。

このような詩人・一戸謙三の変遷の中で、文芸評論家の坂口昌明氏（昭和 8 年～平成 23 年・東京都）は、謙三の初期詩篇に着目。単行本に収められることのなかった若き日の作品群について次のように書いている。「作風は時代の詩的状況を色濃く反映すると同時に、彼の精神をとらえていた虚無感、デカダンスの苦悶を率直に訴えかける姿勢で貫かれていた。（中略）還らぬ青春の情動をうつす鏡としての独自の地歩が、遅まきながら再認識されなければなるまい」（詩誌『朔』155 号・平成 17 年より）。

本展では、抒情詩の魅力に光を当てるとともに、長い詩歴の変遷を読み解き、一戸謙三の詩業の真価にあらためて迫る。



企画展開会初日の様子

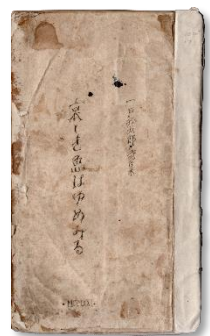
企画展の図録では、藤田晴央氏（詩人）と中嶋康博氏（詩人・岐阜女子大学職員）にそれぞれご寄稿いただきました。

企画展「追憶と郷愁の詩人 一戸謙三」の展示資料より

1 詩集『哀しき魚はゆめみる』

大正 10 年、数え年 23 歳の一戸謙三が、自分の年の数だけガリ版印刷した詩歌集。10 cm×16.5 cm の縦長、24 ページの小冊子に、謙三が大正 8 年から 9 年にかけて作った詩 (16 篇) と短歌 (24 首) が収録されている。近代詩の主流が口語詩に移りゆく大正期、「抒情詩人」一戸謙三の誕生を告げる一冊である。謙三は、ヨーロッパ近代詩の影響を受けた自由詩、津軽方言詩、定型四行詩へと詩形の変貌を遂げていくが、その原点がここにある。

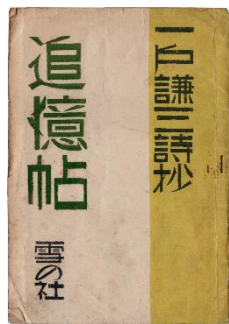
「さみしや、われ人を恋ひぬれ、／今日もこんこんたる蒼き流のほとりにありて、(以下省略)」（「蒼き流のほとり」より）



2 詩集『追憶帖』

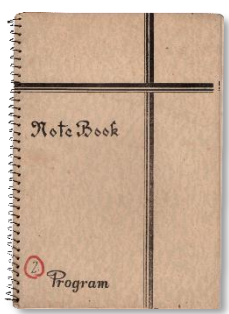
戦後まもない混乱の中、雪の社 (青森県藤崎町) から刊行された。13.5 cm×19.5 cm、20 ページのガリ版印刷だが、表紙・扉・中扉はカラーで印刷されている。謙三の詩人としての才能がみずみずしく花開く時期の作品 10 篇 (大正 11 年・12 年・15 年、昭和 11 年の作) が収録されている。詩人の藤田晴央氏は本展の図録で、「三好達治にとって詩集『測量船』にその詩の要となるものが集中しているように、謙三の場合、詩集『追憶帖』にその抒情のエッセンスをみることができると解説している。

「公孫樹の梢に白い月が浮く午後である。／裏背戸の黍の葉蔭で盗んだキス。／紅らむ頬よ。襟足のほつれ毛よ。野苺が影うつす小川には水馬みづまが群れて跳んでゐた。(以下省略)」（「追憶帖 I」より）



3 詩集ノート (昭和 22 年)

「わたしはまた詩が書きたい／わたしは食うことばかり考えていられない／わたしは生きてるだけではつらい／わたしはまた詩が書きたい」一敗戦のおよそ半年前の昭和 20 年 2 月 11 日、謙三は詩人としての切実な思いを詩「二月十一日夜」に書いた。22 年、それを一部改稿して「詩集ノート」に収めた。戦争協力詩のもとめを避け、無力感・諦念の漂う身辺雑詩をあてどなく書いていた謙三が、本当に書きたかったのは「わたしが生きてるこの世のものにかくれている／実在が現れるような」詩であった。



「探珠『玲』」と「探珠九淵」

一戸謙三の御令孫・一戸晃氏の著作に、『詩人 一戸謙三の軌跡』全 10 冊 (平成 28 年～令和元年・私家版) がある。同書第一集のあとがきには次のように書かれてある。「想えば平成十七年の正月、決意新たに、祖父謙三の青春回想録『不断亭雑記』(謙三が昭和 36 年から 45 年迄、木造町増田の高居から、当時の『弘前新聞』に発信) の整理に取り組むことにしたのだった。NO.589 に至る膨大な資料故、事実関係の把握等、連続する〈壁〉に何度も挫折しかけた。どうにかこうにか、NO.毎に内容を整理し終えた三月、丁度青森県近代文学館では、『生誕百年・夭折の詩人 齋藤吉彦』が開催されていた。気の遠くなるような資料探索の成果は「探珠『玲』」という私家版の冊子となり、平成 17 年から 28 年までの 12 年にわたり 163 号まで発行された。それを大幅に改稿してまとめたのが『詩人一戸謙三の軌跡』全 10 冊である。

「探珠『玲』」という題名は、謙三の盟友・齋藤吉彦 (明治 37 年～昭和 5 年・弘前市) 愛蔵の森鷗外の書「探珠九淵」(珠を九淵に探る) に由来する。鷗外は、大正 3 年 5 月、東北・北海道各地の衛戍病院 (陸軍病院の旧称) の状況視察で弘前を訪れ、吉彦の生家・齋吉旅館に宿泊。その際、自らが揮毫し旅館の主人に贈ったのが「探珠九淵」の書である。当時小学生であった吉彦はこの書を愛し、大学時代の東京の下宿先にまでこの書を持参して床前にかかけ、その居室を「探珠山房」と名付けたという。

その後、「探珠『玲』」は別冊編がスタートし、晃氏の一戸謙三探求の「旅」は続く。



『詩人 一戸謙三の軌跡』10 冊

成田千空 生誕 100 年

寄贈資料を中心として (令和 3 年 12 月 1 日～令和 4 年 2 月 14 日)

「東北に千空あり」とうたわれた俳人・成田千空生誕 100 年の年 (令和 3 年) に多くの方々から千空関係資料の提供があり、その中から千空直筆の資料を中心に紹介した。

成田千空即興句額 (個人蔵) は平成 12 年 8 月 30 日、八甲田の田代平にある山荘で書かれ、櫻庭利弘氏 (画家) が絵を描いた紙に千空が即興句「秋なれや木の家に澄むバツハの曲」を書き、青森県文芸協会の幹部ら参加者それぞれが署名をしたもの。夕食の酒席のあとで、部屋にはバツハの曲が流れていたという。

そのほか、檜森てい氏 (歌人・俳人)、成田圭子氏 (俳人)、野沢省吾氏 (川柳作家)、櫻庭利弘氏 (画家) よりご提供いただいた貴重な資料を千空とのエピソードとともに紹介した。

*新型コロナウイルス感染拡大防止のため
令和 4 年 1 月 20 日～3 月 31 日まで臨時休館。



展示の様子

新収蔵資料展 (令和 4 年 2 月 16 日～5 月 8 日)

明治から昭和の長きにわたり弘前で活躍した俳人、竹内抱甕子 (明治 14 年～昭和 8 年・弘前市) のご遺族から抱甕子旧蔵の資料が当館に寄贈され、「竹内抱甕子文庫」として収蔵することになった。「竹内抱甕子文庫」の資料をはじめ、近年当館に収蔵された著名な俳人の資料を紹介した。

抱甕子旧蔵資料からは、『子規居士十五週忌記念画帖』を展示。大正 6 年、俳人・正岡子規の十五週忌に弟子たちが集まり、記念に刊行した自筆俳画帖で、即興的に、闊達な筆で書かれた俳句や絵からは、当時活躍した文人たちの個性豊かな才能を見ることができると紹介した。

近年当館に収蔵された著名な俳人の資料からは、高浜虚子が長塚節に送った手紙を紹介した。書簡には長塚節の作品「菜の花」について、高浜虚子は細部の〈写生〉を評価しながらも、全体をまとめる〈主観〉が欠如していることを指摘。〈主観〉の大切さを強調した内容が綴られている。



『子規居士十五週忌記念画帖』
句：河東碧梧桐「物さながら炭割れて快し」/画：中村不折



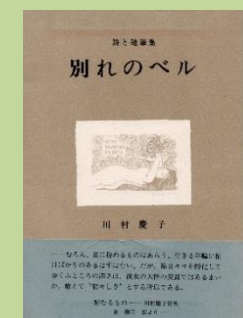
高浜虚子 書簡 明治 42 年 7 月 2 日・長塚節宛

弘前の詩人たち 1960 年代から現代 (1) (令和 4 年 5 月 10 日～7 月 10 日)

第 46 回企画展「追憶と郷愁の詩人一戸謙三」の開催に合わせ、この度のスポット企画展では、謙三が詩人として活躍した弘前市で 1960 年代から現代まで活動した弘前の詩人たちを 3 期に分けて展示する。

本展では、その第一弾として、1920 年代から 30 年代前半にかけて生まれた川村慶子、加藤忠昌、内海康也の 3 人の詩人について紹介する。

川村 慶子
大正 11 年～平成 28 年



『別れのベル』
緑の笛豆本の会
平成 3 年 1 月 31 日

加藤 忠昌
昭和 7 年～平成 29 年



『上野の杜へ』
北方新社
平成 20 年 4 月 20 日

内海 康也
昭和 6 年～



『地霊頌』
土曜美術社出版販売
平成 25 年 11 月 10 日